



FROM KAHU NAKAYAMA



中山可穂さん

KAHO NAKAYAMA



応援ペーパー

『ゼロ・アワー』

(朝日新聞出版)

私たちはこの奇跡のような小説を
ぜひあなたに手に取ってほしい!

発行: 中山可穂さんを応援する会 協力: 中山可穂・朝日新聞出版

エロスとタナトス、愛と死がこの世のすべてである。若い頃はエロスについてばかり書いていたが、わたしも相応に年を取り、これからはタナトスについて書いていくことになるだろうと思う。愛よりも死のほうが、今のわたしにとっては興味深い。ノワールという荒野へ踏み込んだのはそのためだ。そして、まだ見ぬ新しい読者と出会いたいからでもある。もうわたしの残り時間はそう多くないが、中山可穂さんという偏見が消えるまで、わたしは闘う覚悟である。

現在は『ゼロ・アワー』の続編を構想中。広海があの後どうなるのかを考えると胸が張り裂けそうだが、沢渡刑事やキング・リアとの対決を書かずには終われない。前作を超えるパワーと狂熱で、彼女のその後の人生を描き切ってみたい。めざすは五年連続新刊刊行。その後宝塚シリーズ第三弾も執筆予定。そんなに書けるのか自分、と突っ込みたくなるが、どうぞ気長にお待ちください。

ノワールという荒野へ、まだ見ぬ読者へ

中山可穂



ゼロ・アワー、午前零時におまえは死ぬ。おまえはこの私が殺す。
それまで誰にも殺られずに待ってろ。
圧巻のノンストップ・ジェットコースター小説、登場!

ヒロミ

殺し屋ハムレットに両親と弟を殺され、一人生き残った少女。ブエノスアイレスに住む唯一の肉親である日系二世の祖父に引き取られ、家族の復讐を果たすため、凄腕の美しい殺し屋 < ロミオ > となって人の殺し方とタンゴの踊り方を覚えてゆく。

ハムレット

タンゴにしか興味がない孤独な殺し屋の男。ピアソラの「タンゴ・ゼロ・アワー」を暗殺者のための音楽として崇める。

新垣龍三

ヒロミの祖父。ブエノスアイレスにてクリーニング店を営む日系二世。事件後、ヒロミを引き取る。もうひとつの、隠れた裏の顔を持っている。

フリオ

ヒロミがブエノスアイレスで知り合った、不良少年のガキ大将。

キング・リア

ハムレットの雇い主。ハムレットにターゲットを指示してくる。

沢渡玲

クールな美貌の警視庁捜査一課刑事。射撃の腕前は一級で、かつて特殊班捜査係 (SIT) 所属時代に立てこもり犯を二度射殺したいわくつきの存在。

T・J

アルゼンチンのゲリラ組織・モントネロスの軍事訓練を担当するアメリカ人。

中山可穂 (なかやま・かほ)

1960 年生まれ。早稲田大学教育学部英語英文科卒。93 年『猫背の王子』でデビュー。95 年『天使の骨』で朝日新人文芸賞、2001 年『白い薔薇の淵まで』で山本周五郎賞受賞。著書に『感情教育』『花伽藍』『マラケシュ心中』『弱法師』『ケッヘル』『サイゴン・タンゴ・カフェ』『愛の国』など多数。情熱的かつ叙情に満ちた作風が熱烈に支持され、精力的に新境地に挑んでいる。『ゼロ・アワー』に続くノワール続編、『男役』『娘役』に続く宝塚シリーズ第三弾も鋭意準備中。

猫のアストルについて

本書『ゼロ・アワー』で活躍するふてぶてしい巨大猫・アストル。扉に使われた森山大道さんの写真は、「アストルのイメージにぴったり!」と中山さん御自身がつけられて使わせていただいたものです。

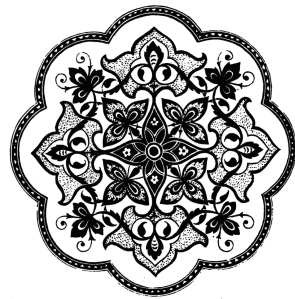
彼の名前は有名なアルゼンチンタンゴの巨匠で、『タンゴ・ゼロ・アワー』というアルバムを出しているアストル・ピアソラから取られています。

熱心なファンの貴方は既に気づいているかもしれませんが、その猫の原型は、『サイゴン・タンゴ・カフェ』(角川文庫)所収の短編『ドブレAの悲しみ』にありました。合わせて読んでみると、より『ゼロ・アワー』を立体的に楽しめますね。

わたしはボカの港のいかわしい娼館の裏口をねぐらとする野良集団の大ボスの子として生を享け、兄妹たちとの苛烈なサバイバル競争に明け暮れたり、近隣の悪ガキどもの壮絶ないじめと戦ったりしているとき、生後四ヶ月めにして幸運にも娼館の客であるバンドネオン弾きのおじいさんに拾われて、あたたかいベッドと三度のめしがついてくる飼猫の身分を与えられることになった。
「おお、おお、かわいらしいボンボンがついておる……男の子じゃな……それではと、今日からおまえのことをアストルと呼ぶことにしよう」
「あんたの神様の名前だね。ギャングみたいな顔つきがどことなく彼に似ていねえ?」の娼婦もその名前に同意した。(『ドブレAの悲しみ』より)

Recommend Voice

奇跡の小説『ゼロ・アワー』に届いた熱い声!!



孤独な殺し屋と少女。今風な題材だが、タンゴという音楽がそれを一掃させる。踊る時の息づかい、殺しの時の鼓動が聞こえる。ハードボイルドかつノンストップ・ジェットコースター小説!

青木健太 高坂書店鶴橋駅前店

読書の先輩が中山さんの小説に骨抜きになっているのを見て、こんなおぼっかり読んでいるとそんじょそこいらの男なんかちゃんちゃらおかしいんじゃないかと心配していた。どうしてくれるんだ。同じ轍を踏む。

新井見枝香 三省堂書店営業企画室

重たく哀しく切ない筈の復讐劇が、中山可穂氏の手にかかると甘美で華麗な情景の連続となる。間違い無く彼女の代表作!

井上哲也 大垣書店高槻店

練達の手によって磨き上げられた漆黒の様式美も見事だが、なによりも心を奪われたのは、タンゴとシェイクスピアに彩られた血と銃弾の復讐劇に華を添える猫だ。その魅惑に、ご注目あれ!

宇田川拓也 ときわ書房本店

愚かな人間たちが繰り広げる命懸けのドラマは、虚しく哀しく可笑しく激しく優しく心の底に突き刺さる。血湧き肉躍る、とはこのことだ! タンゴのリズムに乗せて奏でられる至高の物語に思う存分、酔いしれた…。

内田剛 三省堂書店営業企画室

恋愛小説のイメージが強い中山可穂が、こんなにハードな暗黒小説を生み出すとは。ストーリーの面白さと奥深い人間描写による分厚い作品世界に圧倒された。完璧な殺し屋ハムレットと、美しき殺し屋ロミオがたどる数奇な運命からは目が離せない。

内田俊明 八重洲ブックセンター商品企画部

中山可穂さんの小説が好きだ。文章のリズムが好きだ。登場人物たちのディテールが好きだ。語られる愛が好きだ。私が中山可穂作品と出会ってから15年、期待を裏切られたことはありません。

大西香苗 三省堂書店成城店

緊迫感と疾走感に優雅のエッセンスを利かせると、タンゴの如きノワールが現出。巧みな伏線が見事に繋がる美しき結末まで読み終えた時、このタイトルの意味に陶然となるだろう。中山可穂の紡ぐ物語には中毒性がある!

片山恭子 ときわ書房千城台店

中山可穂、猫、タンゴとくればもう喜びしかない。作品を読める事の嬉しさ。今回はさらにミステリーな要素まで。作品は変わっても呼吸を忘れてしまうほどの魅力は健在。たまらなかった、まさか殺し屋とは! 絶対読んで欲しい、とにかく中山可穂を!

狩野大樹 小田急ブックメイツ新百合ヶ丘店

冒頭は、真夜中。小雨降る中行われる一家殺人事件。タンゴの音楽、アストルと名付けられた猫。どの国の話か不明なまま出来事をなぞっていくと、いつの間にかどっぴりとして『ゼロ・アワー』の世界にはまっている。

事情に深入りしないで仕事をこなす殺し屋たちと、そこから生まれる愛と復讐の物語。中山可穂さんの小説を読むと人の感情の激しさや切なさが胸に迫って中毒になってしまう。

小海裕美 ジュンク堂書店池袋本店

真にわかりあえる相手こそが己の敵だった。まさに宿命ともいえる運命で結びつけられた二人の情熱的な決闘が胸を深くえぐる衝撃作。愛することの苦しみがガツンと伝わってきて心がひりひりした。

小峰麻衣子 ときわ書房 IY 船橋店

タンゴのリズムを刻み、ドレスの長い裾を翻すかのように、ページを捲る手が止まらなかった。物語がクライマックスへ向けて徐々に高まってゆく高揚感。中山可穂による至福へのエスコートは貴方をきっと満たしてくれるはずだ。

櫻井美怜 成田本店みなと高台店

二人の主人公の孤独な魂が、究極の緊張感の中で響き合う繊細な心理描写。重厚なテーマでありながら、息をする間も与えないスピード感溢れる物語。中山可穂氏にしか到達できない、美しく激しいノワールだ。読むしかない!

高頭佐和子 丸善・丸の内本店

家族が惨殺され残された少女、過去と現在のはざままで苦しみながら強く誓うのは「復讐」の二文字。からだ全部が復讐に染まり、堕ちていく様は本当に重く苦しいが、後ろで流れ続けるアルゼンチンタンゴのメロディ・音色が物語に熱を与え続ける。この作品は中山さんの描く優雅なれど残酷で美しく、そして熱い復讐劇の世界にのせられ、呑み込まれ一気読みだった。

——難しいことは置いといて、大事なのは、この物語は、どこか遠くまで読者を連れて行ってしまふ力にあふれた作品だ!ということに尽きる。読み終えた人と話がしたくなるのです。

高橋美里 オリオン書房所沢店

何か没頭したいものを探しているなら、求めているなら、これを読めばいいと思う。ダイソン並みの吸引力で、午前零時のブエノスアイレスへ連れて行ってくれる。殺し屋の息遣いを聴かせてくれる。こんなに気持ちのいい没頭はない。

浜田公子 本の雑誌社営業部

シェイクスピアと猫とタンゴ。美しく哀しい孤高のオンナと強く優しいオトコたち。切ない音楽の中で激しく踊る殺し屋たちの、明日の幸せなんて求めない人生。ああ、私も熱く激しく燃えるように生きてみたい!!!

久田かおり 精文館書店中島新町店

中山可穂さん! さすがである。冷酷で残忍なストーリーを手に負えない愛すべき猫と華麗なタンゴを織り交ぜ、最後まで一気に読める作品に仕上げてる。私の脳内ですでに映像化決定!

星由妃 ゲオ

「悪」を描くと聞いて、かつてないほど胸が躍った。これまでにいくつもの「生命が発する輝き」を描いてきた作家・中山可穂。その閃光が激しいほど、陰に出来る「闇」は濃く、深い。読者諸氏。どうか漆黒に戦慄してほしい。

牧野輝也 朝日新聞出版担当編集

読み終えて本を閉じた瞬間、思わずブラボー!と快哉を叫んだ。ブエノスアイレスの漆黒の夜を風をきって疾走する爽快感、タンゴの陶酔、おさえても滲み出るエロス。孤独と痛みが乾いた心にしみる最高にクールな一冊。

松崎夕里 KADOKAWA担当編集

初めて中山可穂の作品を読む人なら、とびっきりのエンターテインメントとして楽しめるだろう。そして、かつての作品を愛してきた人なら、ほんの少しの寂しさを感じつつも、見え隠れする切なさや愛さずにはいられないだろう。

山ノ上純 ダイハチン書房本店

中山可穂さんの小説の情感あふれる耽美な魅力に、「殺し屋」「タンゴ」「猫」という最高に尖がったアイテムが加わって、もう最強にクールだ。たまらない。日常を忘れて耽溺する。そんな読書にぴったりである。

山本菜緒子 紀伊國屋書店グランフロント大阪店

表面から溢れ出そうになる過去から現在への嫉妬と意地が、物語のなかで狂うように踊りだし、そして静かな叫びを隅々へと流し込む。これ程切実な想いが読者に入り込む作品が他にあるだろうか。必読の一言。

山本亮 大盛堂書店

ハードボイルドなのに心地良い、復讐なのに美しい。タンゴのリズムと銃声が腹底に響く。「残酷な殺人」と「美しさ」と、時に「優雅さ」、「血」と「涙」、「生きる力」このマーブル感は読んだ人しか分からない。

横山みどり 丸善・丸の内本店